

中途養育の当事者の立場から

町田 彰秀 (A-Step・中途養育者サポートネット)

「中途養育」は多くの人にとって聞きなれない言葉かもしれない。私がこの言葉を使い始めたのは、津崎哲郎氏（当時は花園大学教授、現在は認定 NPO 法人児童虐待防止協会の理事長）が、毎日新聞の記事（2010.4.10）「ニュース争論・虐待死 なぜやまない」中に、ステップファミリーの虐待について「中途養育は難しい」と使っていたのを読み、そこから、なんらかの理由で子育てを引き継いだ親族やステップファミリー、また里親養育や養子縁組家庭、児童養護施設職員のような職業的養育、LGBT による子育て等のように、実子ではない子を養育しているが立ち位置の異なる者を統括し「実子ではない子育てに関わる人間を表す上位概念」としてこの言葉が使用出来ると考えたことから始まっている。そして 2010 年から現在まで「中途養育者サポートネット」という Web サイトにおいて、この言葉を使い続けている。

私自身は 2003 年頃より親族の子（姪と甥）を引き取り、「私的な代替養育」に携わる経験をしている。実際に養育に携わる中で、実子とは違う養育の困難を感じ、様々な機関（行政窓口、医療機関、児童相談所）等から個人的に情報を集めてきた。ステップファミリー当事者団体や里親子支援団体など、それぞれの立ち位置の、それぞれの課題を見ながら、中途養育に必要な支援とは何なのかを探ってきた。

今回は、中途養育者の困難・葛藤の共通点と相違点（里親、親族、ステップファミリーの違い）、支援の実情、（経済的問題・制度上の問題・心理的問題・家族関係の問題）について、実際の経験を元に、当事者の立場から言及していきたいと考えている。

私自身はステップファミリーの親族として、2004 年頃よりブログを書いているステップファミリー（主に継母の立ち位置の方）の方々と知り合い、またそのブログや書き込みが炎上し、（当時の 2ちゃんねる等の）掲示板上で匿名の人たちによる「ヲチスレ=Wach Thread」が立ち上がり、誹謗中傷に晒されている渦中に遭遇している。そこからクロズドの SNS が使われるようになっていった部分に関わる経験を通じ、多くの中途養育者が、子育てが立ち行かず、再離婚したり、自ら精神を病んだりして、ネット上から消えていく実情を垣間見ている。

その中で、中途養育による子育ての困難が同一であっても、立ち位置が異なると、それらの課題を共有する術がない現状が判ってきた。大きな壁は児童養護施設や里親等の「社会的養護の人達」と、子育てにおける公式の支援が受けられないステップファミリーや親族等の「私的に養育に携わる人達」の間にある。「社会的養護」は児童相談所と都道府県の決定により、家庭以外の場所で子どもを養育する措置により、家庭分離が行われる立ち位置であり、そこで初めて「公式に認定された養育」が動き出す。しかし、ステップファミリーや親族の場合、養育が動き出すのは善意としての「人としてのありよう」や、「扶養義務」からであって、社会的養護から見ると「私的な（非公式の）養育者」であり、養育に携わるための研修や、支援は存在していない。

この立ち位置の違いは大きいですが、様々な立ち位置で養育に関わる人々を包括する「中途養育」という概念によれば、「養育に関わる際の不公平を取り除き、公正な教育の機会を得られる社会を構築する」ことは可能であるだろう。社会的養護を含む代替養育に関わるスキルアップ、さらに、ステップファミリーや親族養育などいわゆる「私的な（非公式な）養育」に関わる方々に対しても、同様の学びの機会を提供していく事が、子どもの育ちを守る上でも重要であり、児童虐待予防を含む社会課題と考えている。

キーワード：中途養育、代替養育、私的（非公式）な養育